しんらばんしょう
全面教育学研究会通信
2016. 1.1 No.25

《１２月例会報告》

追悼集 編集作業始まる

12 月 5 日（土）、追悼集の体裁について話し合いがもたれました。庄司先生の息子さんも参加され、編集について活発な意見交換がもたれ、編集方針が決まりました。

参加者：庄司先生の息子さん、小田、武田、山田、篠原、植垣、尾崎、伊東、徳永

追悼集編集方針を巡って

当日の話し合いの中心は、追悼集の体裁と予算です。

体裁では、市販の単行本のような「ハードカバー」（費用は 80 万円以上）か全面研の年報のような「ソフトカバー」（10 万円程度）かに意見が分かれました。

全面研の原稿だけの内容であるならばソフトカバーでもいいのですが、成城学園の方々や仮説実験研、関係看護学校及び大東文化大、関係編集者、更に地方会員などの方々も対象とするとしっかりとしたものを作るべきだという意見に傾き、何よりも今回テープおこしした回想録（未完）を庄司先生の足跡をしっかりと残すという意図を重視し「ハードカバー」版にすることに決定しました。

予算に関しては、原稿依頼の際にその意図をしっかりと盛り込み、ご理解の上賛助金という形で集金していこうということになりました。

全面研による編集になるので会員の皆さんにも賛助金を拠出願いたいと考えています。できる限りのご協力をお願いいたします。

息子さん父を語る

今回、追悼集の編集方針とともに成城学園の庄司学級の卒業生の方々の原稿等について説明し、ご理解いただくために庄司先生の息子さんに来ていただきましたが、その際、庄司先生の研究の様子がうかがえる貴重なエピソードを聞くことができました。

様々な話のあと「…思想上の後継者は皆さんです」と全面研に対する温かいまなざしを語られ「父は、全面教育学という名前はいいだろう」と、「全面教育学」という銘々を家族の方にうれしそうに話された若かりしころの様子を聞くことができました。

研究に没頭していた庄司先生を彷彿させる貴重な話が聞けた気がしました。

原稿まだの方、急いで送付を

編集担当の小田さんによると、今月中（1月）にも全面研以外の原稿執筆者に原稿依頼を開始するそうです。全面の方々でまだ原稿を書いていない方、至急電子媒体で小田さんに送付して下さい。

原稿の量　A4 1枚程度（1600字前後）
内容　庄司先生への追悼文
原稿送付方法
　メールで小田さんに送付してください。
　・連絡先
　［ tomiodarian@yahoo.co.jp ］

［人の道一生論］

臨終、魂の行方編

篠原賢朗

忙しい中ですが、篠原さんが長野から駆けつけ『人の道一生論　授業書　臨終、魂の行方編』（全30ページ）を発表しました。

「人の道一生論」は、柳田国男の小学6年生の社会科の教科書の最後に登場する単元です。

人の一生をイメージし自分の人生を知るこの人の一生学習は、自らの人生を俯瞰し、中学進学から更に上級学校への希望や人生設計を想像する上で貴重です。特に弱者としての幼児や老人へのまなざしは重要です。

今回篠原さんが取り上げた「臨終」は、全面研でも「死の教育」としていままで様々な試みが行われてきました。

柳田の教科書は昭和28年のもので古いという印象は否めません。篠原さんの授業書はこの古い単元を現代に合うように作り替えた貴重な提案です。

死は昔から禁忌として扱われていますが、先祖の人々は丁重に死者を送りました。忌み言葉や葬儀の様々なしきたりからそれがうかがえます。

祖霊が近くで見守っている昔からの信仰は我々日本人には素直に受け入れやすいものです。そのことが、お盆や十日夜などの行事からもうかがえます。

今回特に注目したいのは授業書の中で紹介されている絵本『恋ちゃんのはじめての看取り』（農文協2012）です。

私も早速書店で買い求めましたが、恋ちゃんという女の子がおばあちゃんを看取るという貴重な映像が神々しくも自然に紹介されていました。

この絵本、全面研でかつて取り上げた『地獄』以来の推薦図書にしてもいいと思いました。

なおこの授業書まだ教室で展開されていません。是非どなたか実践してみてほしいと思います。

賀状の山田さんの言葉の中に、全面研は実践目標が必要ですね、というメッセージがありました。現役を退いたメンバーが多い中、どのように実践を再生していくか考える年にしたいものです。

全面研次回例会のお知らせ

日時：3月5日（土）14：00～
場所：成城学園大学職員棟3F
内容：追悼集、偲ぶ会について
　　終了後持ち込みレポート発表あり